

山神古墳・桐野1号古墳

－ 宅地造成事業に伴う発掘調査報告書 －

2012

岐阜県 可児市教育委員会

山神古墳・桐野1号古墳

－ 宅地造成事業に伴う発掘調査報告書 －

2012

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1. 本書は岐阜県可児市中恵土 1667 番 1 における山神古墳 (21214-07498)、中恵土 1694 番 2 における桐野 1 号古墳 (21214-07500) の緊急発掘調査報告書である。本書では遺跡の登録名に沿って記述を進めるが、調査・検討の結果、各々の遺跡の時代性と性格とともに地区名を冠し、上野山神弥生墳丘墓、上野桐野 1 号弥生墳丘墓の呼称がふさわしい。
2. 本調査は土地区画整理事業に伴うもので、開発事業である有限会社 セイケン、ORIBE 不動産より可児市が委託を受け、可児市教育委員会が調査主体となって実施した。発掘調査経費は、1,813,474 円であり、全て事業者からの委託金で賄った。
調査面積は山神古墳が約 45 m²、桐野 1 号古墳が約 50 m²である。
3. 現場及び整理作業者の体制は次のとおりである。

教育長 大杉 一郎

教育部長 亀井 和紀

文化振興課長 林 良治（平成 23 年 4 月～8 月）桜井 孝治（平成 23 年 8 月～）

文化財係長 渡邊 義信

調査担当者 長江 真和

調査補助員 成尾 孝子 本田 博志

作業員 五木田 かちこ 遠山 皓一 長沼 信雄 前田 友子 渡邊 政吾

4. 本書の編集と執筆は長江が担当した。遺物の整理は成尾・本田が行い、鉄製品、玉類、土器の実測は長江・成尾・本田が、トレースは長江が行った。石器の実測は、みよし市歴史民俗資料館職員 平井義敏が行った。
5. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。
6. 本調査にあたり、次の方々にご教示を頂きました。記して、お礼を申し上げます。

（敬称・肩書略、五十音順）

青木 一男 井川 桂子 内堀 信雄 恩田 知美 風間 栄一 篠原 和大

千野 浩 長瀬 治義 馬場 伸一郎 藤村 俊 森島 一貴

有限会社 セイケン ORIBE 不動産

7. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真はすべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

目 次

例 言

| | |
|----------------------|----|
| 第1章 発掘調査の経緯と経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 山神古墳の経過 | 1 |
| 第3節 桐野1号古墳の経過 | 2 |
| 第2章 古墳の立地と環境 | 3 |
| 第3章 山神古墳 | 5 |
| 第1節 墳丘 | 5 |
| 第2節 埋葬施設 | 5 |
| 第3節 遺物 | 5 |
| 第4章 桐野1号古墳 | 12 |
| 第1節 墳丘 | 12 |
| 第2節 埋葬施設 | 12 |
| 第3節 遺物 | 13 |
| 第5章 総括 | 24 |
| 参考文献 | 26 |
| 写真図版 | 27 |
| 報告書抄録 | 42 |

白ページ

(目次の裏)

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成 23 年 4 月 有限会社 セイケンより中恵土地内における宅地開発事業の開発申請が提出された。開発申請の区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地である山神古墳（21214-07498）、桐野 1 号古墳（21214-07500）が含まれていた。事前に踏査を行ったところ、両古墳ともに墳丘らしきマウンドが確認できたため、開発業者と協議を行った。協議の結果、これらの古墳に対して本発掘調査が必要であると判断し、山神古墳約 45 m²、桐野 1 号古墳約 50 m²を対象とした。

伐採後、5 月末から発掘調査を開始した。両古墳とも併行して作業を行い、8 月 12 日に調査を終了した。

第2節 山神古墳の経過

山神古墳は、南東側が道路整備のために大きく削られており、当時の形状を想定することは難しい。また、墳頂部には川原石が積まれており、近現代の陶磁器片等も表探され、いつの時期か不明ではあるが、何かを祀っていた様子であった。

雑木の伐採終了後、平成 23 年 5 月末日にレベル移動を行い、調査前の地形測量を行った。そして、墳頂部と考えられる部分を中心として墳丘上の堆積土を掘削した。墳頂部付近の堆積土を 30 cmほど除去すると、隅丸長方形のプランが検出された。この隅丸長方形プランに合わせ、主軸を設定し四分割して四分法による掘削を行い、土層断面等の記録をとった。床面の状況が不明瞭であり、二段階に分けて平面を掘削した。遺物の出土は点在してみられる状況であり、掘削を優先させるため出土した時点で記録をとった。

墳丘部分は、プランの主軸にあわせて大きく削平されている南東側を除き、三方向にトレンチを設定して手掘りによる掘削を行った。土壌内掘削後には、主軸ラインにあわせ断ち割りを行った。

地形測量図は 1/100、トレンチの土層断面図は 1/20、土壌の平面及び土層断面図は 1/20 で図化している。

本発掘調査に係る関係法令の諸手続きは次のとおりである。

| | | | | |
|------|-------------------|------------|--------|-----------|
| 事業者発 | 平成 23 年 4 月 13 日付 | 教文振第 14 号 | 県教委宛 | 発掘の届出 |
| 県教委発 | 平成 23 年 4 月 25 日付 | 社文第 3 号 38 | 事業者宛 | 発掘調査指示の通知 |
| 市教委発 | 平成 23 年 6 月 1 日付 | 教文振第 32 号 | 県教委宛 | 発掘調査着手の報告 |
| 県教委発 | 平成 23 年 6 月 9 日付 | 社文第 9 号の 4 | 市教委宛 | 受理の通知 |
| 市教委発 | 平成 23 年 8 月 16 日付 | 教文振第 50 号 | 県教委宛 | 埋蔵物保管証 |
| 市教委発 | 平成 23 年 8 月 16 日付 | 教文振第 51 号 | 可児警察署宛 | 埋蔵物発見届 |
| 市教委発 | 平成 23 年 8 月 18 日付 | 教文振第 55 号 | 県教委宛 | 発掘調査終了報告 |

第3節 桐野1号古墳の経過

桐野1号古墳は「首吊り塚」と呼ばれていたという伝承がある。古墳の南及び西方向は民家の造成以前から一部削平されていた。また、北及び東方向も造成により、一部分が削平されていると考えられる。近くで縄文時代の遺跡は確認されていないが、表採では打製石斧や石皿などの破片がみられた。

平成23年5月末日から調査前の地形測量を行った。地形測量後、墳頂部と考えられる部分を中心として墳丘上の堆積土を掘削し、墓壙のプランを検出す作業を行った。墳頂部付近の堆積土を20cmほど除去すると、楕円形のプランが検出された。楕円形のプラン北側は根の擾乱により一部不明瞭であり、南側も不明瞭であった。検出された楕円形のプランにあわせて主軸を設定し、四分割して四分法による掘削を行った。墓壙を掘り進め、棺部分のプランを検出した。棺のプランを検出した時に、北側の不明瞭な部分については土層を観察するラインをずらして、墓壙の肩の部分の図面を作製した。棺検出時に鉄剣が墓壙の断面から検出されたため、南側の表土をはぐ面積を増やし、鉄剣が埋納されていた土壤を検出した。C-C'ラインの土層図面では土壤のラインは不明瞭であつたため、作図できていない。

棺部分については東西のラインは墓壙と同様にとれたが、南北ラインは棺の中心を通っていないため、別に設定した。棺内掘削後には、主軸ラインにあわせて断ち割りを行った。また、遺物は残しながら掘削するのが困難になった場合のみ図化し、取り上げを行った。

墳丘部分には、楕円形プランの主軸にあわせて四方向にトレーナーを設定し、手掘りによる掘削を行った。

地形測量図は1/100、トレーナー・墓壙・主体部の平面及び土層断面図は1/20、遺物出土状況図は1/10で図化している。

本発掘調査に係る関係法令の諸手続きは次のとおりである。

| | | | | |
|------|-------------|---------|--------|-----------|
| 事業者発 | 平成23年4月13日付 | 教文振第15号 | 県教委宛 | 発掘の届出 |
| 県教委発 | 平成23年4月25日付 | 社文第3号39 | 事業者宛 | 発掘調査指示の通知 |
| 市教委発 | 平成23年6月1日付 | 教文振第31号 | 県教委宛 | 発掘調査着手の報告 |
| 県教委発 | 平成23年6月9日付 | 社文第9号の3 | 市教委宛 | 受理の通知 |
| 市教委発 | 平成23年8月16日付 | 教文振第52号 | 県教委宛 | 埋蔵物保管証 |
| 市教委発 | 平成23年8月16日付 | 教文振第53号 | 可児警察署宛 | 埋蔵物発見届 |
| 市教委発 | 平成23年8月18日付 | 教文振第54号 | 県教委宛 | 発掘調査終了報告 |

第2章 古墳の立地と環境

可児市は、岐阜県の中南部にあたり、南は多治見市と愛知県犬山市、東は御嵩町、土岐市と接している。北は木曽川を隔てて、美濃加茂市、坂祝町、八百津町と境をなしている。

市内は北部を除くと、平地の周りを山地が取り囲み、木曽川が形成した河岸段丘独特の地形がみられる。市域の地質は美濃帯中生層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群、瀬戸層群、第四紀の段丘堆積物などの堆積物が覆って分布している。

可児市中恵土から御嵩町比衣地区の間は、古墳が多く点在する地域である。古墳時代以前の弥生墳丘墓としては、瀬田地内にある神崎山弥生墳丘墓、御嵩町比衣地内にある金ヶ崎遺跡がみられる。神崎山弥生墳丘墓は、6世紀初頭に築かれた神崎山古墳の盛土の下から検出されている。古墳造成時に墳丘墓の盛土は削られているが、土壌内埋土からは土器片や副葬品が検出され、弥生時代後期後半の墳丘墓と考えられている。金ヶ崎遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭にかけて9基の墳墓群が検出された。埋葬主体が検出されたのは3基であるが、その中のSX05では銅鏡3点、管玉11点が副葬されていた。

この地域の古墳は多くが未調査であるが、古墳時代後期に属する古墳が多いと思われる。調査が行われている前期の古墳としては、竪穴式石槨の一部が確認されている伏見大塚1号墳、中期の古墳としては、可児地域最大規模の円墳である宝塚古墳、玉類・直刀・五鈴鏡などが出土した天神ヶ森古墳、直刀・鉄鎌・盤龍鏡がみつかった赤坂古墳が挙げられる。今回調査地点の近辺にみられる柿の木塚古墳は、昭和53年に調査された直径約30mの円墳であり、中期以前にさかのぼる可能性が高いとされる。桐野1号古墳の北側にある桐野2号古墳は古墳の盛土が一部残り、須恵器片が採集されている。

この地域は、前波古墳群と伏見古墳群という古墳時代前・中期の前方後円（方）墳を有する地域でもある。前波古墳群は、西寺山古墳（前方後方墳 墳長60m）、野中古墳（前方後円墳 墳長62m）、国指定史跡長塚古墳（前方後円墳 墳長72m）からなる。西寺山古墳は葺石を有する前方後方墳であり、二重口縁壺形埴輪が出土した他、南山大学が所蔵する三角縁三神五獸鏡が出土した可能性も残る。野中古墳は墳丘の大部分が失われているが、「可児町史」通史編によれば、2つの竪穴式石槨の埋葬施設を有し、三角縁三神三獸鏡、刀剣8本などが出土したといわれている。長塚古墳は東濃地方で最大級の前方後円墳であり、後円部の主体部からは粘土郭が検出された。また、前方部の主体部では撰文鏡、石劍、玉類などが出土している。

東の御嵩町伏見地内には伏見古墳群がみられ、前方後方墳の高倉山古墳（墳長42m）、東寺山1号墳（墳長41m）、2号墳（墳長58m）からなる。これらの古墳群は、東濃地方で唯一、前半期の前方後円（方）墳が築かれた地域であり、首長の系譜を考える上で重要である。高倉山古墳は出土遺物や段築、葺石の有無も確認されておらず、築造の時期を知る材料は限られているが、可児地域における最古の古墳に位置付けられている。伏見古墳群にはその他に前方後円墳とされる長畠1号墳や伏見狐塚古墳が所在したが滅失し、内容は不明である。

今回調査を行った山神古墳と桐野1号古墳は、前波古墳群と伏見古墳群の中間に位置する。中恵土の中位段丘面に立地し、南の可児川、石森・瀬田方面の沖積地を一望することができる。近年開通した国道21号可児御嵩バイパスの西側に位置し、宅地造成や道路開発により、両古墳の立地環境の変化は著しい。

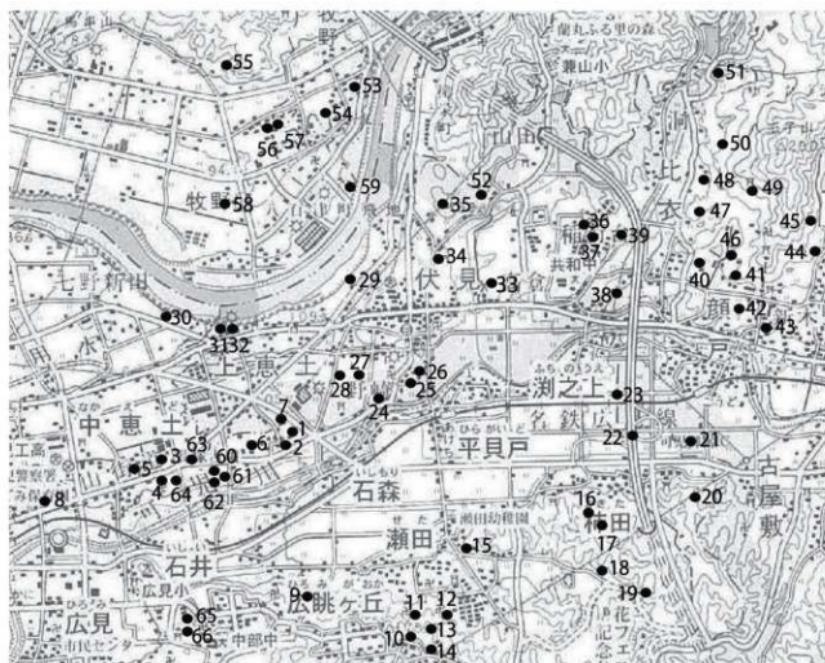


図1 周辺遺跡分布図 (S=1/30000)

| | | | |
|------------|-------------|--------------|---------------|
| 1 桐野1号古墳 | 18 北ヶ洞1号墳 | 35 新発知古墳群 | 52 山田横穴1~7号古墳 |
| 2 山神古墳 | 19 北ヶ洞2号墳 | 36 念事ヶ平1~2号墳 | 53 東中國古墳 |
| 3 長塚古墳 | 20 杉ヶ洞古墳群 | 37 稲荷山古墳群 | 54 下屋古墳 |
| 4 西寺山古墳 | 21 頭戸山ノ神遺跡 | 38 金ヶ崎遺跡 | 55 白山古墳 |
| 5 野中古墳 | 22 柿田遺跡 | 39 青木横穴墓 | 56 火塚古墳 |
| 6 上野稻荷古墳 | 23 頭戸南遺跡 | 40 坂本天神山古墳 | 57 トヤノ下古墳 |
| 7 桐野2号古墳 | 24 堂根古墳 | 41 坂本古墳群 | 58 小貝戸2号古墳 |
| 8 清水経塚古墳 | 25 東寺山一号古墳 | 42 花塚古墳 | 59 小貝戸1号古墳 |
| 9 段下古墳 | 26 東寺山二号古墳 | 43 頭戸藤塚古墳 | 60 柿の木塚古墳 |
| 10 七ツ塚古墳 | 27 伏見狐塚古墳群 | 44 庚申塚古墳 | 61 道下古墳 |
| 11 しゃもじ塚古墳 | 28 大塚古墳群 | 45 惠觀寺古墳群 | 62 銭塚古墳 |
| 12 瀬田菫本古墳 | 29 生沢古墳 | 46 諏訪神社古墳 | 63 御妃塚古墳 |
| 13 粘り塚古墳 | 30 狐塚古墳 | 47 打越古墳群 | 64 桃塚古墳 |
| 14 大洞白山塚古墳 | 31 長烟1~2号墳 | 48 比衣丸山古墳 | 65 身隠山御嶽古墳 |
| 15 神崎山古墳 | 32 新町墓地古墳 | 49 陣ヶ峰群集墳 | 66 身隠山白山古墳 |
| 16 柿田古墳 | 33 高倉山古墳 | 50 市洞1~6号古墳 | |
| 17 前山古墳群 | 34 伏見白山神社古墳 | 51 杉ヶ洞古墳群 | |

表1 周辺遺跡一覧表

第3章 山神古墳

第1節 墳丘

土層の観察から、旧表土（図4 土層4、8、10、17）の上に盛土の状況が確認された。堆積状況を確認するため、土壤を中心として三方向にトレーンチを掘削した。

盛土の上面には根等による攪乱がみられる他、川原石を集積した部分もみられた。川原石を集積した部分からは弥生時代中期の遺物が出土しているが、調査前に墳頂部にあった川原石積みと様子が似ていることから、近年に何かを祀った遺構と思われる。南西側の盛土は、旧表土面から10～40cmの土を積み上げた後に、外側に土留めの盛土を行い、内側に充填していく構築方法がみられる。

北東側及び北西側は、中央付近から外側に向けて盛土を行っており、南西側とは構築過程の様子が異なる。

南東部分では、川原石等の礫が混じるしまりの弱い黒色土の中から、弥生時代中期の土器や柳茶碗等の近世の遺物が出土しており、南側の道路を建設した際に攪乱を受けていると考えられる。

墳丘は削平にあっており、目視では墳形が円形に見えるが、判然としない。規模は円形であれば、直径約10mと推定される。残存する墳丘の高さは1m程度であり、墳丘端で周溝はみられない。

南西側のトレーンチでは旧表土の下で土壤が検出され、28層からは縄文時代晚期～弥生中期の土器が出土していることから墳丘の築造は弥生時代中期後半以降と想定される。

第2節 埋葬施設

主体部と思われる土壤は、現存している墳丘のやや東側に位置する。平面形は不整形な梢円形を呈し、長さ2.1m、幅0.88m、深さ0.6mを測る。土壤は主軸に直行する形でベルトを残し、掘削した。

土壤は、盛土を構築した後に掘り込んだと考えられ、旧表土面まで深さは達していない。堆積土は平行堆積し、検出された床面は北東側に向かってやや下がっている。西側と比べ、東側の幅がやや狭くなるため、頭位は西向きとも考えられる。また、埋設棺は検出状況及び土層断面から箱形木棺とも考えられるが、木質や棺の痕跡は確認できておらず、判然としない。堆積土からは縄文土器片及び弥生時代後期の土器片が出土しているが、床面付近での遺物の出土はみられなかった。

土層の状況から盗掘にあっている可能性は低く、墳丘盛土や主体部覆土の遺物から判断すると、廻間I式期以降に造られた墳墓と考えられる。

第3節 遺物

山神古墳では表探資料も含め、縄文土器約250点、弥生土器約20点、山茶碗5点、近世陶器7点が出土した他、石器が7点みられた。その中で実測可能な15点を実測した。

1、2、3は、ともに南西トレーンチ28層から出土した深鉢形土器であり、縄文時代中期後半～末に位置づけられる。1は、棒描沈線による渦巻文がみられる。2は、口縁部であり棒描沈線文による梢円区画の一部がみられる。3は、沈線の区画の中に縄文を施している。

4は、南西トレーンチ28層から出土した甕である。平らな底部から緩やかに上方に開き、外面は不定方向の条痕文により整形される。弥生時代中期後半と考えられる。5も同様に南西トレーンチ28層から出土した甕の頸部と考えられ、外面に凹線文が施されている。

6、7、8、9は、墳丘南東側の黒色土から出土している。6は、甕の口縁部と考えられる。口縁部外面や下方に櫛描波状文を施し、内面はナデ調整後に櫛描波状文を施す。中部高地系か、弥生時

代中期後半～後期と考えられる。7は、甕の口縁部であり外面は横方向のハケメ調整がされ、内面はナデ調整と口縁部付近に櫛描列点文が巡る。弥生時代後期と考えられる。8は、甕の体部であり、外面はタタキが施され、内面はナデによって調整される。弥生時代後期と考えられる。9は、甕か鉢の口縁部である。外面はミガキの後に端部をナデ調整し、内面は横方向のハケメ調整が行われる。内部に一部赤彩がみられ、廻間I式期と考えられる。

10は、墳丘上の川原石を集積した部分から出土している壺の体部と考えられる。外面にミガキ調整がみられ弥生時代後期と考えられる。

11は、土壤内埋土から出土した甕の肩部で、外面には横方向と单斜方向のハケメ調整がみられ、弥生時代中期後半～弥生時代後期と考えられる。

12は、南西トレンチの盛土内から出土した高杯の口縁部である。内・外面ともにヘラミガキによつて調整され、内面は口縁端部のみミガキ後ナデによる調整を行う。廻間式期と考えられる。

13は、基部が欠損しているが、残存部から短冊形もしくは撥形の打製石斧と思われる。横長の剥片を素材とし、側辺は敲打により潰れている。刃部の剥離は荒く、輪郭も凸状を呈する。法量は長さ 12.7cm（残存部）・幅 7.0cm・厚さ 2.0cm・重さ 217.5g。ホルンフェルス製。

14は、基部が欠損しているが、打製石斧と思われる。大形の横長剥片を素材とし、側辺は敲打により潰れている。刃部の輪郭は弧状を呈し、使用によると考えられる稜線の磨滅や、細かな剥離痕も見られる。弥生時代の石鎌の可能性もある。法量は長さ 15.1cm（残存部）・幅 11.7cm・厚さ 2.0cm・重さ 433.2g。ホルンフェルス製。

15は、凹基無茎鎌である。胴部から先端部にかけて両側縁がやや内湾している。法量は長さ 2.5cm・幅 1.6cm・厚さ 0.3cm・重さ 0.7 g。下呂石製。

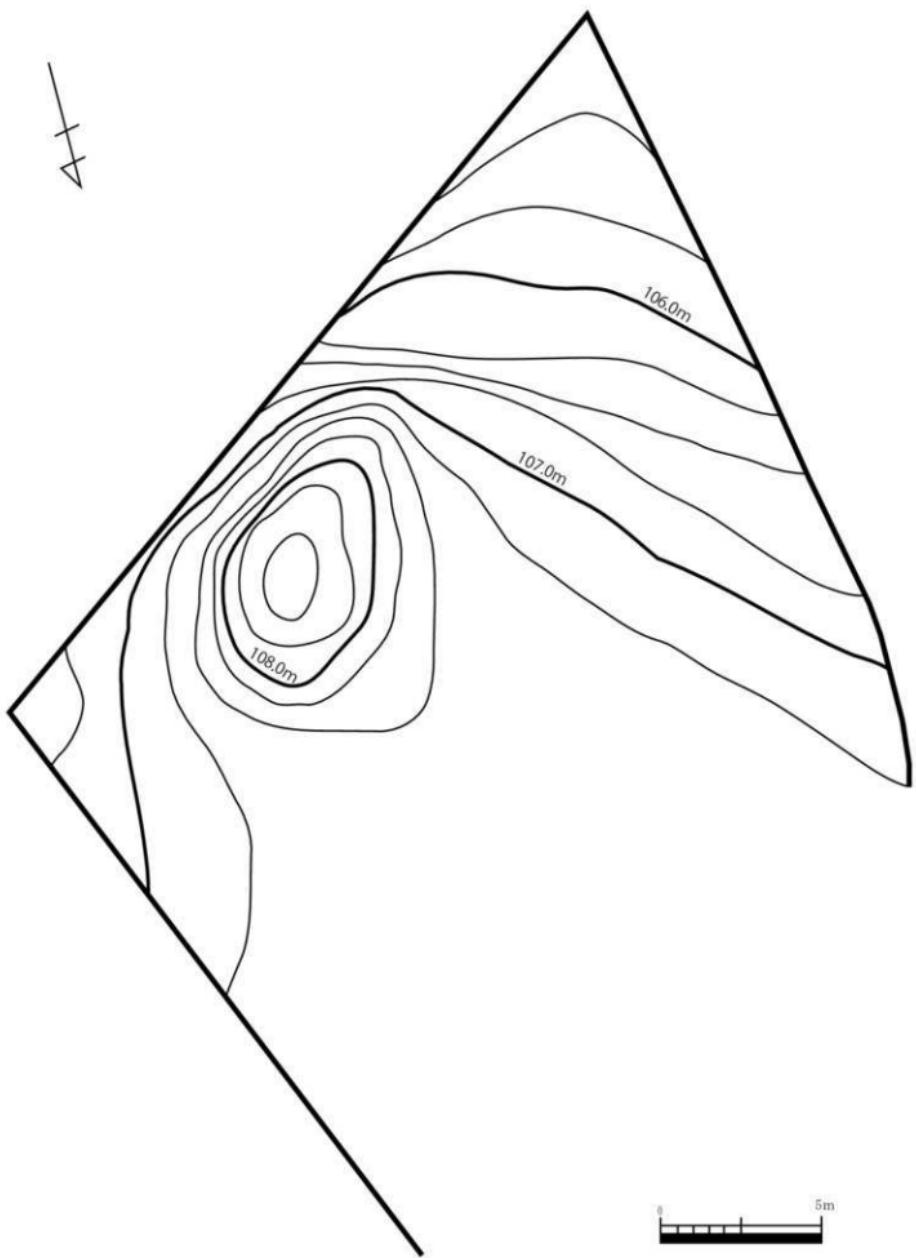


図2 山神古墳墳丘測量図（調査前）（S=1/150）

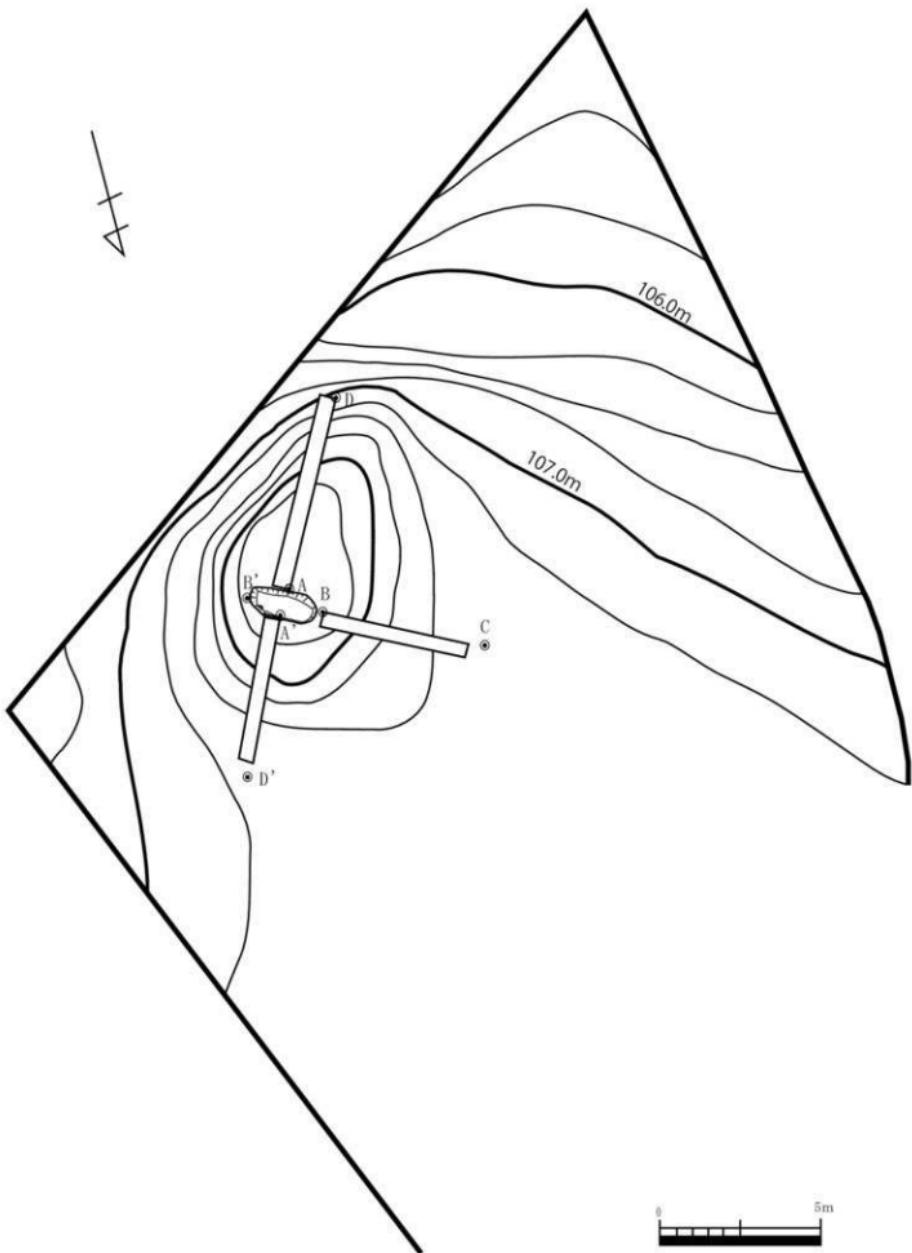


図3 山神古墳遺構・トレンチ配置測量図 (S=1/150)

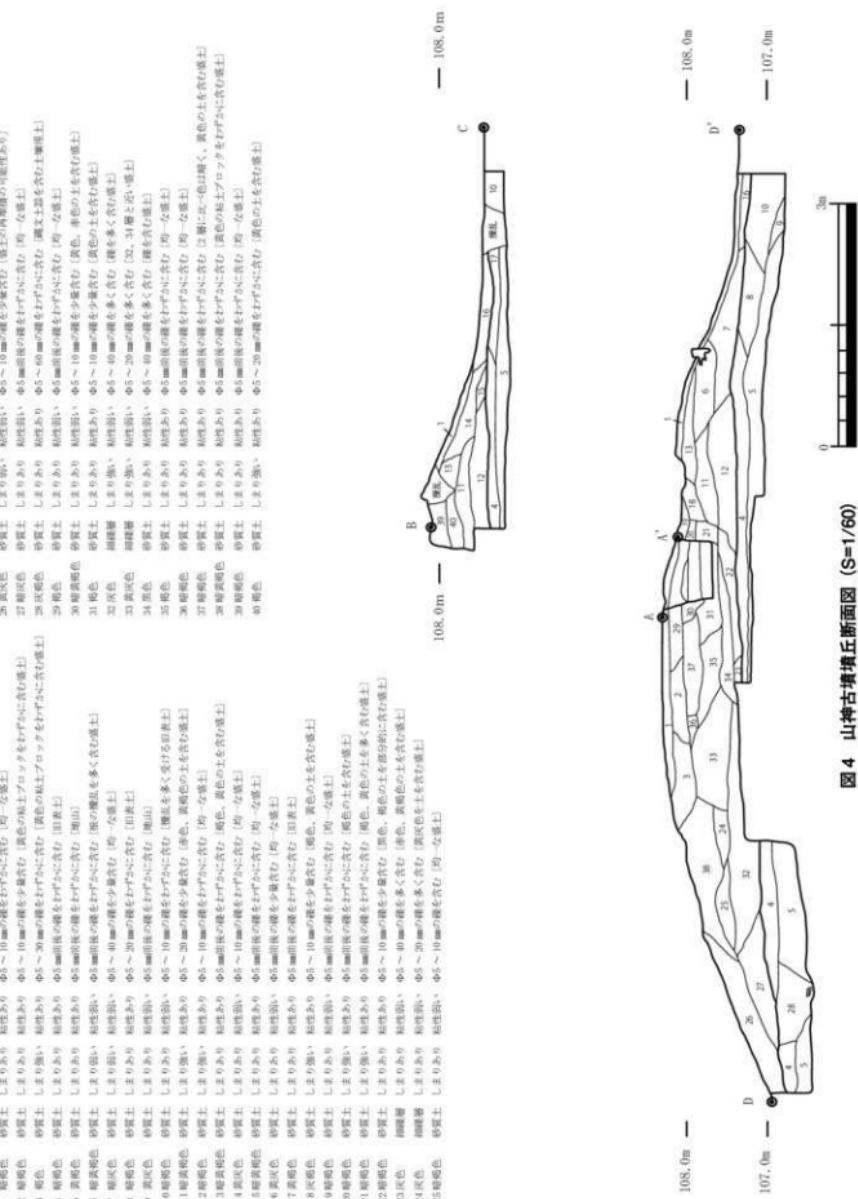
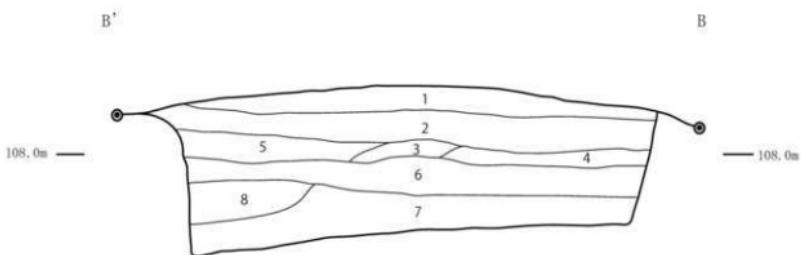
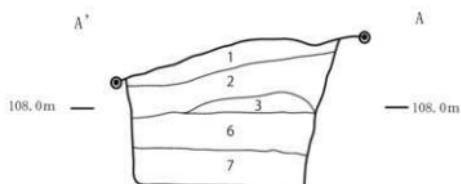
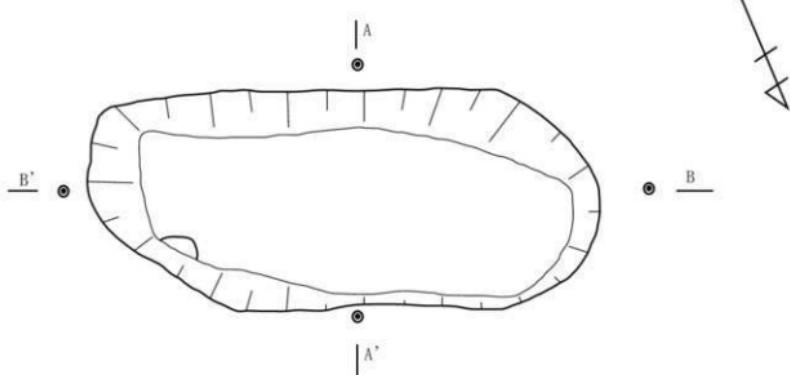


図4 山神古墳丘断面図 (S=1/60)



- 1 暗褐色 砂質土 しまりあり 黏性弱い $\Phi 5 \sim 10$ mmの繩をわずかに含む [ブロック状の黄色土を含む]
 2 棕色 砂質土 しまりあり 黏性弱い $\Phi 5 \sim 10$ mmの繩をわずかに含む [篆文器・石礫含む]
 3 暗褐色 砂質土 しまりあり 黏性弱い $\Phi 5 \sim 10$ mmの繩をわずかに含む [ブロック状の黒色土を含む]
 4 暗褐色 砂質土 しまりあり 黏性弱い $\Phi 5$ mm前後の繩をわずかに含む
 5 黒色 砂質土 しまり弱い 黏性弱い $\Phi 5$ mm前後の繩を含む
 6 暗褐色 砂質土 しまり弱い 黏性あり $\Phi 5$ mm前後の繩を含む
 7 暗褐色 砂質土 しまり弱い 黏性あり $\Phi 5 \sim 10$ mmの繩を含む
 8 黑色 砂質土 しまり弱い 黏性あり $\Phi 5$ mm前後の繩を含む



図5 山神古墳主体部平面図及び断面図 (S=1/20)

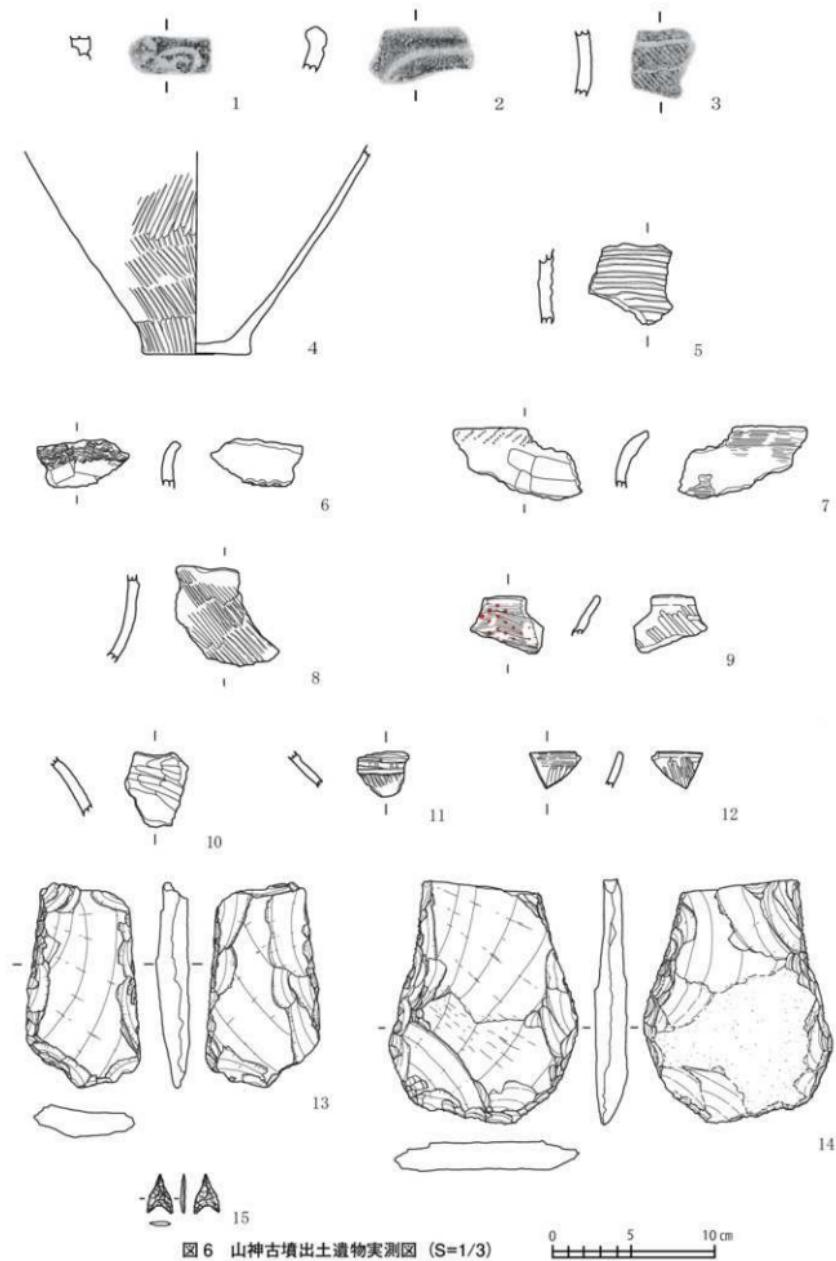


図6 山神古墳出土遺物実測図 (S=1/3)

0 5 10 cm

第4章 桐野1号古墳

第1節 墳丘

墳丘は旧表土である17層を基盤とし、盛土によって築造されている。堆積状況を確認するため、墓壙を中心として四方向にトレンチを掘削した。

東側、北側では109.25m付近で墳丘の一次構築面がみられ、西側及び南側は一次構築面が109.5m付近とやや高くなる。一次構築面までは四方向のトレンチから外側に土留めを築いて、内側に土を入れる工法が共通してみられる。そこから墳頂までは、南側及び東側は一次構築と同様の方法で盛土を行う様子がみられるが、北側及び西側では内から外へと盛土を行っている。盛土はしまりがある土が多く用いられ、均一な土と部分的に混じりがある土がみられるが、互層状にはなっていない。また、西トレンチでは、東壁近くの109.6～109.3m付近で径15cm～25cmの川原石が出土していたが、規則的に並んでおらず、土層にも対応していないため、墳丘構築に伴うものではなく、混入したものと考えられる。墳丘構築後に埋葬施設にあたる部分を掘削し、埋葬後墓壙を埋めたと考えられる。

ブロック塀の手前までしか掘削を行っていない南側や墳丘盛土の流出及び後世の改変等がみられる東側では、明確な墳丘端が確認できない。また、北側及び西側では、土層断面の盛土や旧表土が切れている状況から墳丘端が確認できたが、周溝は確認できなかった。

現存する状況をみると、墳形は円形にもみえるが判然としない。残りの良い東西断面から墳丘規模を想定すると、直径もしくは一辺約18.3mと考えられる。旧表土面からの盛土高は約2.3mであり、盛土の中からは縄文土器、弥生土器が出土している。

第2節 埋葬施設

埋葬施設は墳頂部のほぼ中央で検出されたが、第1章で記述したように北側と南側は一部不明瞭な部分があった。墓壙規模は東西に4.56m、南北に3.44mを測り、梢円形を呈する。棺の埋設部分も含め、墓壙底までの深さは約1.5mである。墓壙の東側は西へ緩やかに下がる形状を呈し、その傾きは棺の埋設部分までみられる。この傾斜は棺の搬入のためと想定され、埋土も東から流れ込んだ様子がみられる。墓壙の西側及び北側は約0.5mの平坦面がみられ、南側は約0.8mとやや広めである。墓壙南側底面から朱またはベンガラが一ヶ所で出土しているが、墓壙内の他の部分に撒かれた様子はみられない。

墓壙内から出土した遺物は、土器の破片であり面的には分布していない状況であるが、細片であることから儀礼などに伴う混入物の可能性が考えられる。残りの良い遺物では、赤彩がみられるパレススタイル壺の破片が2点、墓壙内の床面から廻間I式前半の有段口縁鉢が出土している。その他墓壙内からは、北側の壁付近の高い位置からガラス玉1点が出土している。この部分は掘肩が不明瞭で平面でのプランは確認できおらず、後世の攪乱の可能性がある。北側の不明瞭な部分以外では、土層の堆積状況から盜掘にあった可能性は低いと考えられる。墓壙内の埋土はしまりが強い土が大半を占め、墓壙内の遺物からも廻間I式後半までは棺埋設後に墳頂部まで埋め戻していると考えられる。

墓壙以外の遺構としては、墓壙の一部を壊すような形で土壙がみられる。土壙の中からは鉄劍と土器片が出土している。土壙の規模は1.68m×0.88mであり、墓壙の掘肩と同一面から掘り込まれている。検出の際には北側の掘り込みのプランはみられず、南側のプランも鉄劍が出土した後に調査範囲を拡げたことにより検出された。北側のプランがみえなかつことと、墓壙内から出土した

土器と同時期の土器も出土していることから、同一時期の掘り込みと考えられる。鉄剣がほぼ完形の状態で出土しているため、盗掘ではなく、副葬または供獻するための掘り込みと想定される。鉄剣はほぼ水平に置かれ、切先を北に向いている。

主体部は東西に2.2m、南北に1.24m、深さ約0.8mを測る。南北の幅が西から東に向けて狭くなっていくことから、頭位は西側とも考えられる。A-A'ラインにみられるように棺を置く際には76層、89層を充填し、77層から土器片が出土していることから、貼り床は行わずにその上に棺を置いたと考えられる。棺の明瞭な痕跡は確認できなかったが、主体部の77層の下層には暗灰色の混じりのない土が一部でみられ、層状にはみられないが棺底の痕跡の可能性がある。また、74層が棺の上面の痕跡である可能性も考えられ、棺の規模は長さ約1.8m、幅約0.7m、厚さ約0.5mと推定される。棺は、東西、南北の土層断面の状況から舟底状もしくは割竹形木棺の可能性が考えられる。掘肩は盛土部分で止まり、旧表土面まで至っていない。

第3節 遺物

桐野1号古墳では表採資料も含め、細片ではあるが、縄文土器約20点、弥生土器約20点、土師器約300点、須恵器1点、石器50点がみられた。その中で実測可能な17点を実測した。

1は、墓壇南東側の埋土から出土した。く字状口縁甕の口縁部であり、外面に横方向のハケ目がみられる。廻間I式前半と考えられる。2は、墓壇南東側土壇の鉄剣に伴い出土した甕の口縁部と思われるが、調整痕ははっきりしない。廻間I式前半と考えられる。3は、墓壇南東側から出土した受口状口縁甕の口縁部であり、口縁部付近の外面に刺突文が巡る。廻間I式後半と考えられる。4は、主体部北東側埋土から出土した受口状口縁甕の口縁部である。口縁端部に面を有し、胎土が粗く、文様はみられない。廻間I式後半と考えられる。5は、東トレンチ盛土内から出土した高杯の口縁部である。口縁部付近に段を有し、口縁端部に向かって反る形状を呈する。山中終末～廻間I式期と考えられる。6は、主体部南西側埋土から出土した高杯の脚端部である。端部付近で緩やかな面を有する。廻間I式後半と考えられる。7は、墓壇北東側埋土から出土した高杯の脚端部である。磨滅しているため、調整は不明である。廻間I式前半と考えられる。8は、東トレンチ盛土内から出土した高杯の脚端部と考えられる。胎土は粗く、色調は赤褐色であり、廻間I式前半と考えられる。9は、墓壇北東側埋土から出土した高杯の脚部である。脚部はラッパ状に開き、端部はやや丸みをおびる。廻間I式と考えられる。10は、主体部南東側埋土の上面から出土した壺か甕の底部である。底部付近にハケメがみられ、廻間I式後半と考えられる。11は、墓壇北西側埋土から出土した鉢の口縁部と考えられる。胎土は粗く、焼成もやや不良である。廻間I式後半の口縁部と考えられる。12は、墓壇北西側埋土から出土した有段口縁鉢である。口縁端部は丸みを有し、頸部にかけて緩やかな段がみられる。口縁部下方と頸部に列点文を巡らし、外面には煤が付着している。廻間I式前半と考えられる。13は、南トレンチ盛土内から出土した有段口縁の鉢か甕の口縁部である。口縁部は段を形成し、段部分には列点文が巡る。段より下方は煤がみられ、剥離している可能性が考えられる。廻間I式期と考えられる。

14は、短冊形の打製石斧である。円礫から剥がした横長の剥片を素材とする。側辺は敲打により潰れている。刃部の輪郭は弧状を呈するが、一部欠損している。法量は長さ13.8cm・幅4.6cm・厚さ1.3cm・重さ97.7g。ホルンフェルス製。15は、短冊形の打製石斧である。横長の剥片を素材とし、側辺は敲打により潰れている。刃部は弧状を呈し、使用によると考えられる稜線の磨滅もみられる。法量は長さ10.9cm・幅4.5cm・厚さ1.5cm・重さ106.3g。ホルンフェルス製。

16は、円基鎌である。法量は長さ2.5cm・幅2.0cm・厚さ0.7cm・重さ3.3g。チャート製。17

は、平基有茎鎌である。法量は長さ 2.1cm（残存部）・幅 1.4cm・厚さ 0.3cm・重さ 0.7g。下呂石製。先端部は、欠損している。

鉄劍

墓壙と切り合う土壤内から出土している。全長 46.4cm を測り、7 破片になっているがほぼ完形である。片方の関部分は錫膨れのため、不明瞭である。身部は鎌を中心にはば対称であり、茎部は関から茎尻に向けてややすぼまる。肉眼観察では目釘穴は確認できず、刃部・茎部に木質、布等の残存はみられない。刃部長 35.0cm、刃部中央幅 2.9cm、刃部中央厚さ 0.5cm、刃部関部幅 3.2cm、刃部関部厚さ 0.5cm。茎部長 11.4cm、茎部関部幅 1.9cm、茎尻幅 1.5cm、茎尻厚さ 0.3cm、重さ 272 g。

ガラス小玉

墓壙内から出土している。緑がかった青色で中には気泡がみられる。両断面が平行でないことから、軟化したガラスをひきのばして制作したガラス管を裁断する引きのばし法によって製作されたものと考えられる。長さ 6mm、径 5.5mm、重さ 1 g 未満。

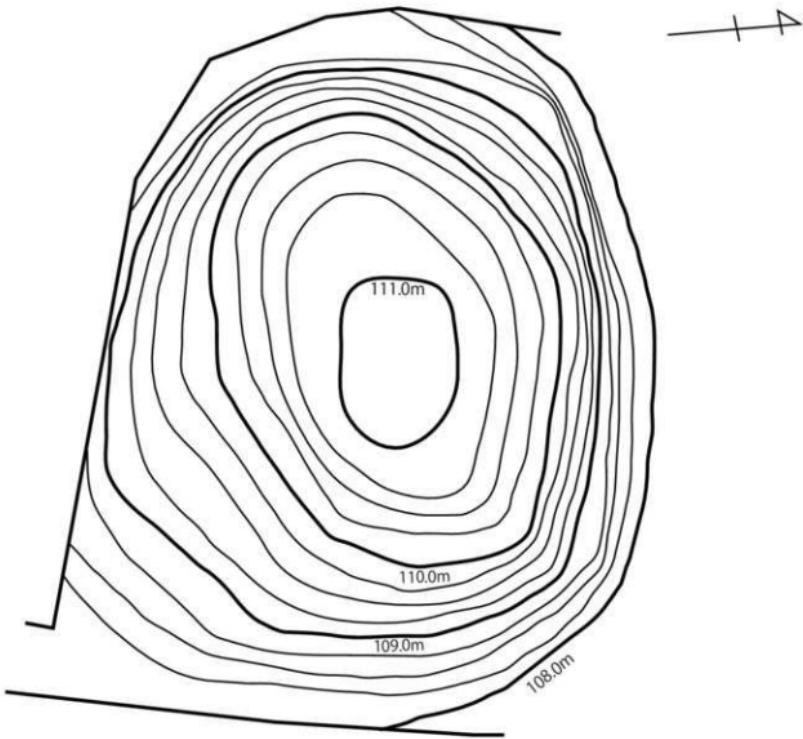


図7 桐野1号古墳墳丘測量図（調査前）(S=1/150)

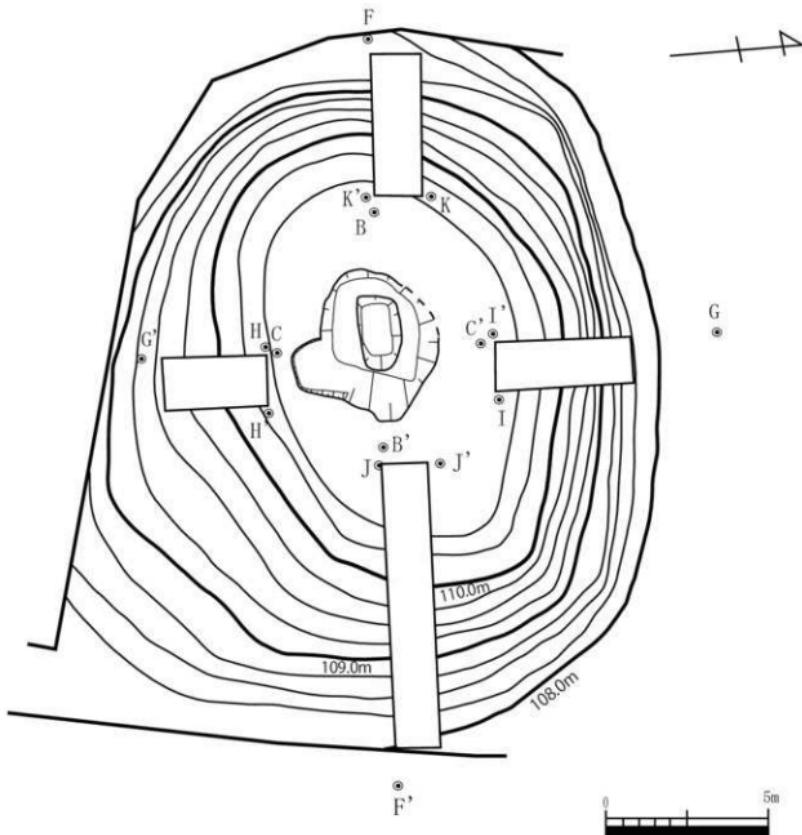


図8 桐野1号古墳遺構・トレンチ配置測量図 (S=1/150)

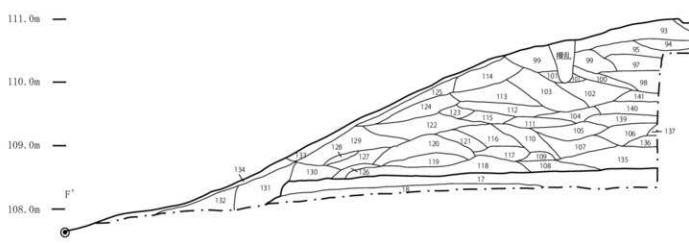


図9 墳丘東西断面図 (S=1/60)

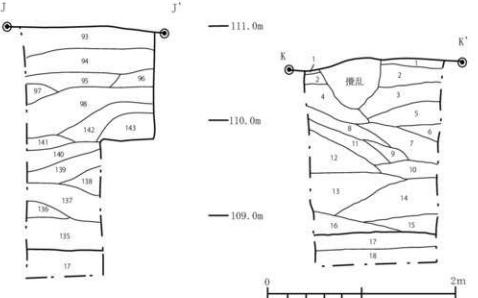
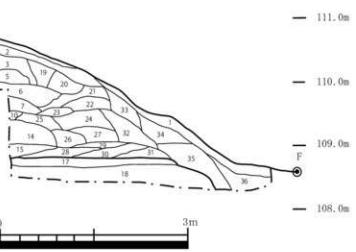
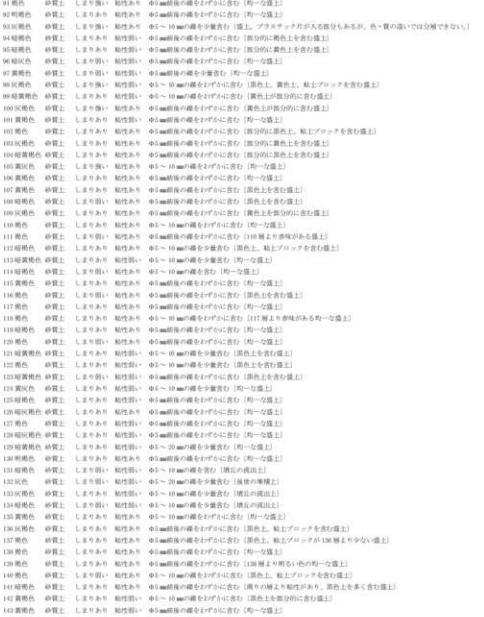


図 10 東トレント西面・西トレント東面断面図 (S=1/40)



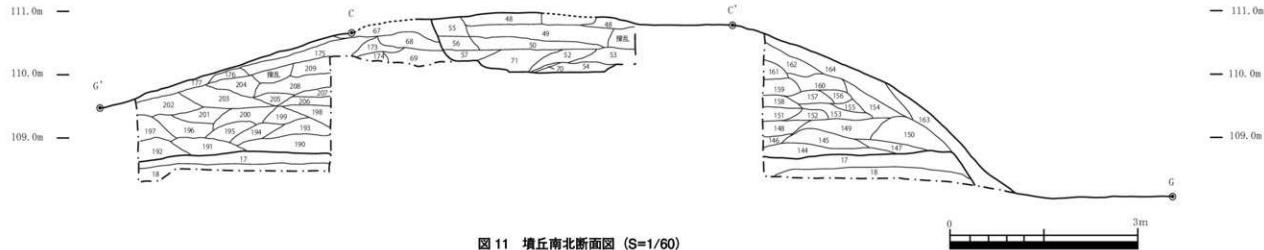


图 11 填丘南北断面图 (S=1/60)

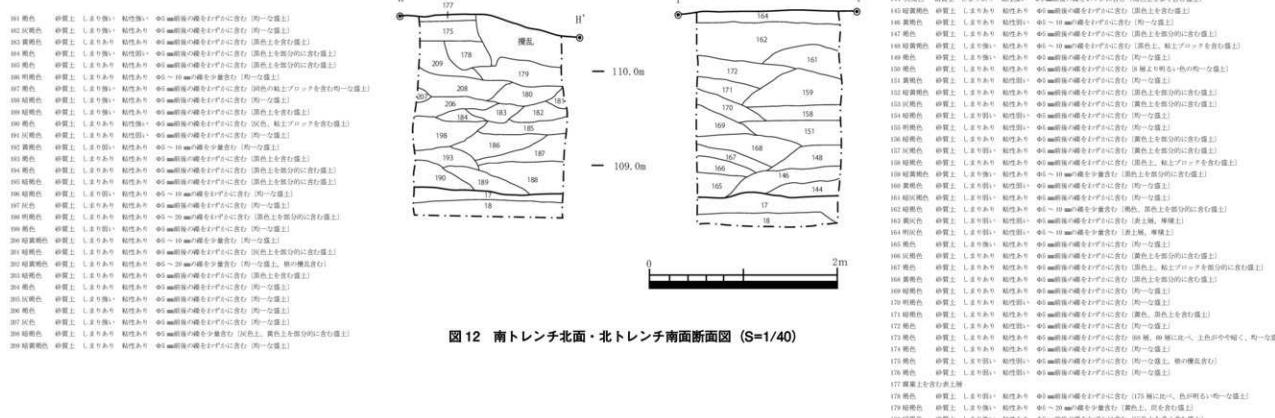


図 12 南トレンチ北面・北トレンチ南面断面図 (S=1/40)

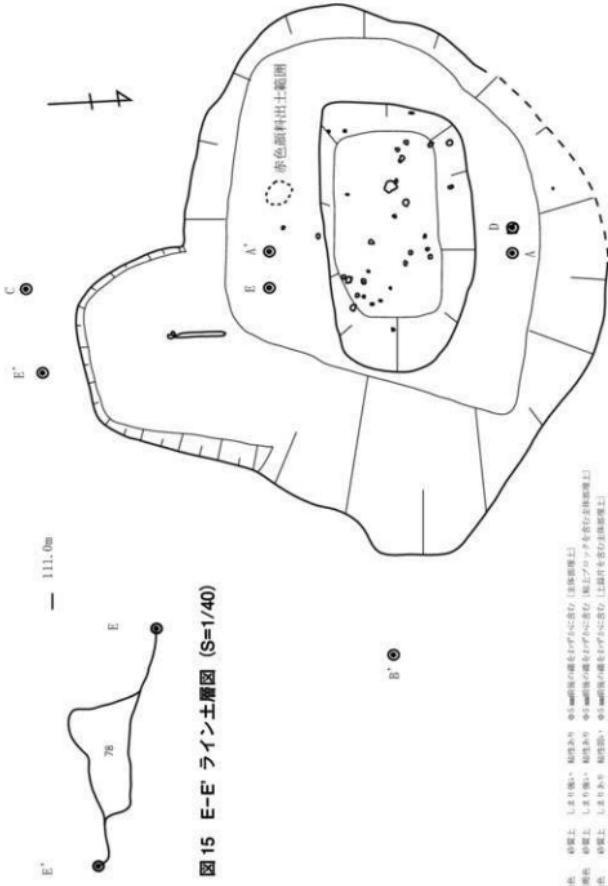


図 15 E-E' ライン土層図 (S=1/40)

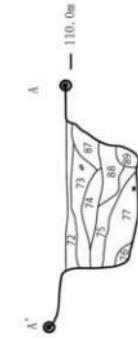


図 14 A-A' ライン土層図 (S=1/40)

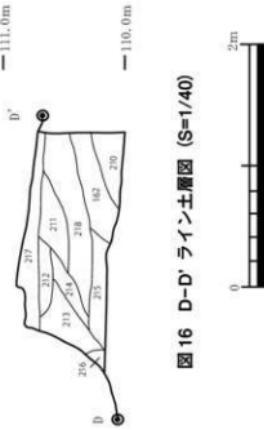


図16 D-D' ライン土層図 (S=1/40)

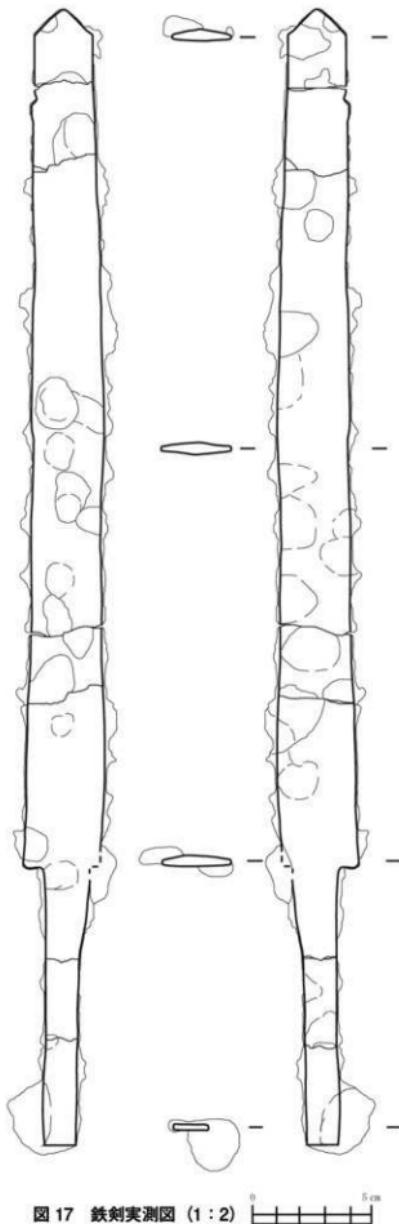


図 17 鉄剣実測図 (1 : 2)

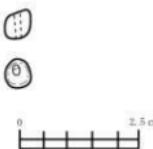


図 18 ガラス玉実測図 (1 : 1)

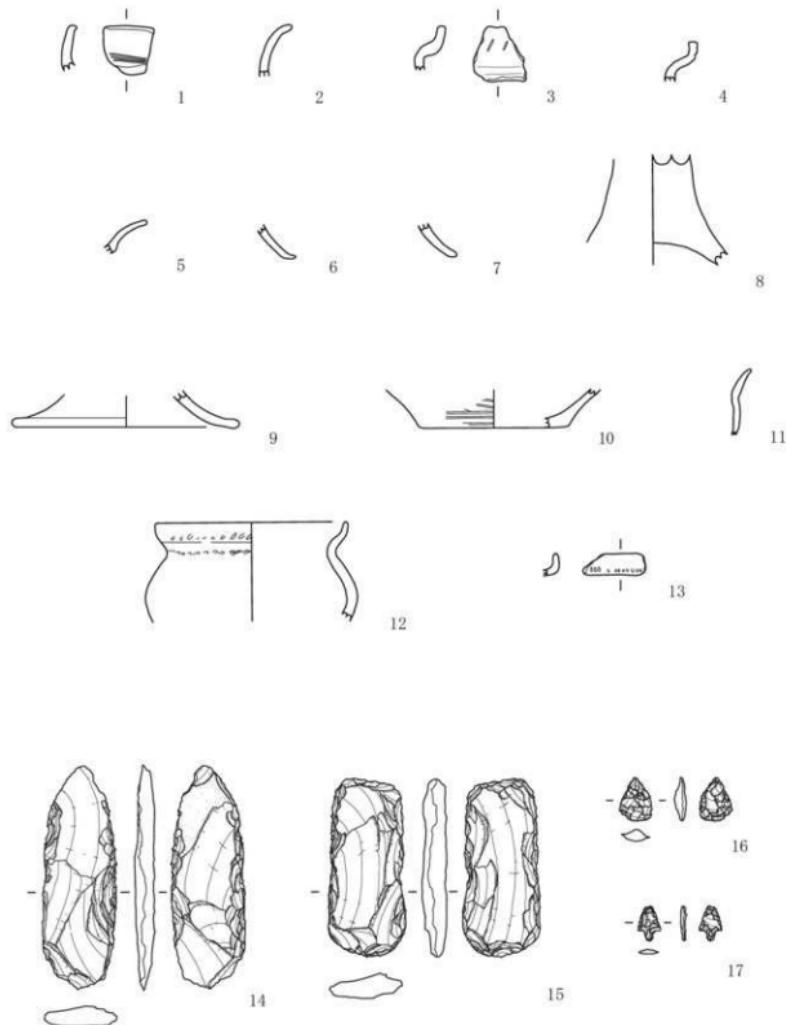


図19 桐野1号古墳出土遺物実測図 (S=1/3)



第5章 総括

山神古墳

本遺跡は桐野1号古墳と近接した立地である。床面直上の遺物もなく、主体部の埋土から高蔵～山中式期の土器片がみられるが、造墓や埋葬の時期を細かく特定することは困難である。しかし、旧地表より下層から弥生時代中期後半の土器が出土していることからそれ以降に造営され、盛土内に廻間様式内の土器片もみられることがから、桐野1号古墳に近い時期に造営されたことが考えられる。また、本遺跡では中部高地系の可能性がある土器が出土しており、中部高地とのつながりも考えられる。周辺は、後世の改変が加わっているが、桐野1号古墳と同じ段丘面上に立地しており、これらの他にも弥生墳丘墓が築かれていた可能性もある。墳丘規模や主体部の状況等から桐野1号古墳に準ずるような被葬者像が描けるのではなかろうか。

遺跡の呼称は「山神古墳」であったが、本報告をもって、地区名を冠し、「上野山神弥生墳丘墓」と改めたい。

桐野1号古墳

本遺跡の被葬者について、近隣の金ヶ崎遺跡と比較しながらみていきたい。

ここから少し離れた金ヶ崎遺跡の墳墓は、出土した土器からSX05とSX03が廻間I式後半～II式前半と考えられ、SX01やSX02がこれに後続して築かれている。愛知県西上免遺跡や大垣市東町田遺跡でも、方形周溝墓とともに前方後方形の周溝墓（弥生墳丘墓）が築かれる状況がみられ、近隣で後続する前方後方墳との有機的関係も考えられる。

棺形式は、金ヶ崎遺跡や本遺跡では可能性も含めて舟底状木棺が採用され、金ヶ崎遺跡では赤色土器、本遺跡でもパレススタイル土器や赤色顔料による葬送儀礼が認められるなど、各地域における弥生墳丘墓との共通性がみられ、この地域の古墳出現前夜における埋葬儀礼の状況がうかがえる。また、美濃において鉄劍が出土した弥生墳丘墓には、金ヶ崎遺跡SX02の他に廻間I式期と考えられる伊瀬粟地遺跡が挙げられる。金ヶ崎遺跡SX02の鉄劍は両端が欠損しているため詳細は不明であるが、伊瀬粟地遺跡出土の鉄劍は刃闊双孔であり、北部九州と中部高地・関東地方にかけて分布する型式であることが指摘されている。X線による撮影を行っていないため不明な点はあるが、この時期この周辺に出土例が少ないことが被葬者の性格をうかがう材料となる。

鉄劍の副葬や赤色顔料を使った埋葬祭祀など、金ヶ崎遺跡にみられる弥生墳丘墓群と同様な要素をみることができるが、本遺跡は出土した土器から金ヶ崎SX05やSX03よりやや前出する廻間I式期の弥生墳丘墓と考えられる。周りは後世の改変により地形が変わっているが、同一段丘面上に近接して築かれた上野山神弥生墳丘墓と比較すると、より上位の被葬者像が推測される。本遺跡や上野山神弥生墳丘墓が立地するこの段丘上に出自を共にする集団が存在し、金ヶ崎弥生墳丘墓群を造墓した集団と勢力が拮抗していたのではないだろうか。從来は、伏見古墳群から前波古墳群への首長権の移動（統合）が考えられるとともに、伏見古墳群で最も古い高倉山古墳は神崎山弥生墳丘墓や金ヶ崎5号弥生墳丘墓の被葬者の系譜を引き継ぐ可能性があると考えられている（可児市史より）。

今回の調査により、本遺跡は金ヶ崎遺跡の弥生墳丘墓群と類似する部分もみられるが、別集団の長の存在をもうかがわせる弥生墳丘墓の可能性もある。神崎山や金ヶ崎弥生墳丘墓等の被葬者と本遺跡の被葬者は並存する集団の長と想定し、一つには高倉山古墳の首長へと出自の系譜が引き継がれることが考えられる。また、二つには伏見古墳群の高倉山古墳は、金ヶ崎弥生墳丘墓群の集団と神崎山弥生墳丘墓の集団、前波古墳群の西寺山古墳へは本遺跡や山神弥生墳丘墓、基盤となる2つ

の出自集團に系譜が分かれていた可能性もあり、下図に示す2つのモデルを提示しておきたい。

市内にみられる弥生時代の墳墓である神崎山弥生墳丘墓、山岸猿塚遺跡は不明な点もあるが、いずれも可児川沿いに開けた沖積地を見下ろす丘陵突端部に独立して造られている。当時の生活区域や新たな首長の墳墓などの解明には、今後の周辺調査に期するところが大きい。

本遺跡の名称は「桐野1号古墳」であったが、本報告をもって地区名を冠し、「上野桐野1号弥生墳丘墓」と改めたい。

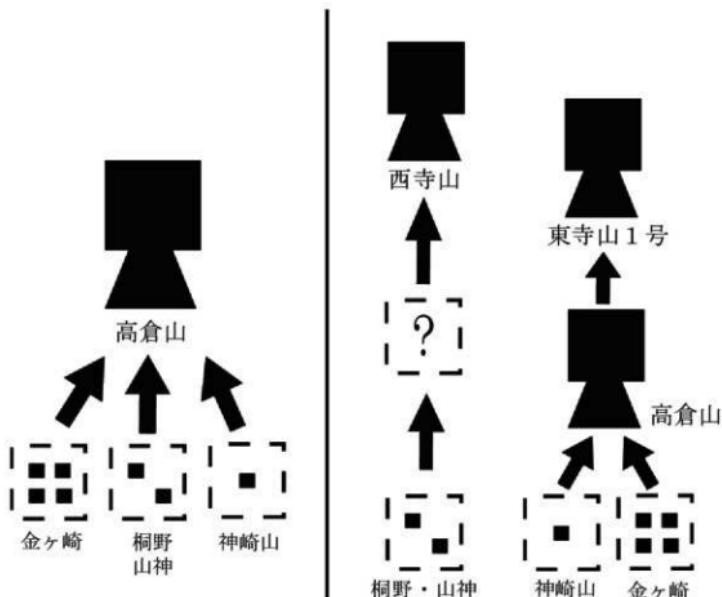


図20 弥生墳丘墓から古墳に至る系譜の2案

参考文献

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第78集
- 石黒立人 他 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 小野木学 2000『額戸南遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 可児町 1980『可児町史 通史編』
- 可児市 2005『可児市史 第一巻 通史編』
- 可児市 2007『可児市史 第四巻 自然編』
- 可児町教育委員会 1976『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』
- 斎藤基生 1994『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会
- 佐野康雄 他 1993『尾崎遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 佐野康雄 1998『牧野小山遺跡 C 地点』(財)岐阜県文化財保護センター
- 鈴木元 他 2004『東町田遺跡』大垣市教育委員会
- 高橋克壽 他 1999『前波の三ツ塚』可児市教育委員会
- 成瀬正勝 他 2000『砂行遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 早野壽人 他 2003『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』(財)岐阜県文化財保護センター
- 吉田英敏 他 1994『川合遺跡群』可児市教育委員会

山神古墳



山神古墳調査前（南西より）



山神古墳調査後（北より）

山神古墳



土壤墓検出状況（北より）



北東トレンチ西面（南東より）



北西トレンチ南面（北より）



南西トレンチ西面（東より）



土壤墓 A-A'ライン南側（東より）



土壤墓 A-A'ライン北側（西より）



土壤墓 A-A'ライン南側下層（東より）



土壤墓 A-A'ライン北側下層（西より）

山神古墳



土壇墓 B-B'ライン西側（北より）



土壇墓 B-B'ライン東側（南より）



土壇墓 B-B'ライン西側下層（北より）



土壇墓 B-B'ライン東側下層（南より）



土壇墓完掘状況（南より）

山神古墳



土壤墓断ち割り南側（東より）



土壤墓断ち割り北側（東より）



土壤墓断ち割り東側（北より）



土壤墓断ち割り西側（北より）



墳丘南東側擾乱土除去後（東より）



南西トレンチ西面（東より）



旧表土下土壤土器出土状況（東より）



作業風景



28層内堆積土



28層内堆積土



3



4



28層内堆積土



28層内堆積土



埴丘南東側黒色土（左：外面 右：内面）



川原石集積部分



土壤内埋土



盛土内

山神古墳



土壤内埋土



盛土内



埴丘南東側黒色土



埴丘南東側黒色土



表採



表採及び墓壙内



表採及び盛土内

桐野1号古墳



桐野1号古墳調査前（北より）



桐野1号古墳主体部（東より）

桐野 1 号古墳



調査終了後全景（北東より）



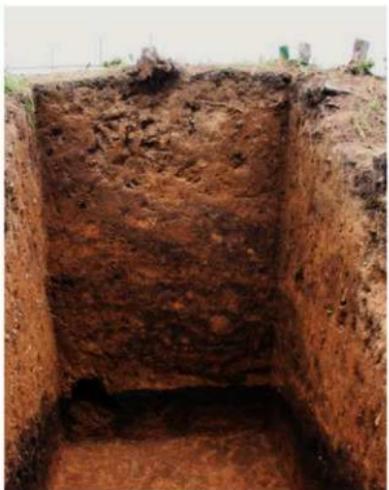
墓壇内鉄剣出土状況（西より）



東トレンチ南面（北より）



東トレンチ西面（東より）



西トレンチ東面（西より）



西トレンチ南面（北より）



南トレンチ西面（東より）

桐野 1 号古墳



南トレンチ北面（南より）



北トレンチ南面（北より）



北トレンチ西面（東より）



墓壙検出状況（西より）



墓壙内東西断面東側（北より）



墓壙内東西断面西側（南より）

桐野 1 号古墳



墓壙内南北断面北側（東より）



墓壙内南北断面南側（西より）



墓壙内朱出土状況（西より）



墓壙内北側壁付近出土ガラス玉（南より）



墓壙北側土器出土状況（西より）



墓壙中央付近パレススタイル壺出土状況（北より）



墓壙完掘、主体部検出状況（西より）



主体部検出状況（東より）

桐野 1 号古墳



主体部 B-B'断面西側（南より）



主体部 B-B'断面東側（南より）



主体部 A-A'断面北側（西より）



主体部 A-A'断面南側（西より）



鉄剣出土土壤検出状況（東より）



主体部完掘状況（北東より）



主体部断ち割り状況（東より）



作業員集合写真

桐野 1 号古墳



桐野 1 号古墳出土鐵劍

桐野 1 号古墳



墓壙内埋土出土ガラス玉



墓壙内埋土



1



2

鉄剣出土土壤内埋土



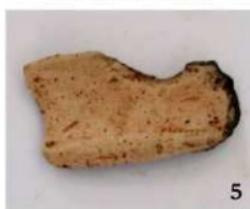
3

墓壙内埋土



4

主体部内埋土



5

トレンチ内盛土



8

トレンチ内盛土



6

主体部内埋土



9

墓壙内埋土



7

墓壙内埋土

桐野 1 号古墳



主体部内埋土



墓壇内埋土



盛土内



墓壇内埋土



墓壇内出土赤彩土器



墓壇及び主体部内埋土



盛土内



表採及び墓壇内埋土



表採及び盛土内

報告書抄録

| ふりがな | やまがみこふん・きりのいちごうこふん | | | | | |
|-------------------|--------------------------|------------|------------|--------------------|--------------------|---|
| 書名 | 山神古墳・桐野1号古墳 | | | | | |
| 副書名 | 宅地造成事業に伴う発掘調査報告書 | | | | | |
| シリーズ名 | 可児市埋文調査報告 | | | | | |
| シリーズ番号 | 44 | | | | | |
| 編集者名 | 長江 真和 | | | | | |
| 編集機関 | 可児市教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地 | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2012年3月16日 | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地名 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 | 調査期間 面積 | 調査原因 |
| やまがみこふん 山神古墳 | 岐阜県可児市中恵 土 1667-1 | 21214 | 7498 | 35° 43' 16" | 134° 07' 70" | 20110530～ 20110812 45m ² |
| きりの 桐野1号 古墳 | 岐阜県可児市中恵 土 1694-2 | 21214 | 7500 | 35° 43' 26" | 137° 07' 70" | 20110530～ 20110812 50m ² |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 山神古墳 | 弥生 墳丘墓 | 弥生時代 | 箱形木棺墓か? | 石器、縄文土器 弥生土器 | | |
| 桐野1号 古墳 | 弥生 墳丘墓 | 弥生時代 | 舟底状木棺墓 | 鉄剣、縄文土器 弥生土器、石器 | | |

可児市埋文調査報告 44

山神古墳・桐野1号古墳

平成24年3月16日 印刷

平成24年3月16日 発行

編集・発行 可児市教育委員会

〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地

Tel 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751

印刷 丸理印刷株式会社